

池ノ上遺跡最新出土遺物展

～妻沼地域の律令期集落跡の調査成果について～



会期：平成28年5月31日（火）～10月30日（日）

会場：熊谷市立熊谷図書館・郷土資料展示室（3階）

1 はじめに

平成26年度、市内妻沼にあります池ノ上遺跡^{いけのうえ}の範囲内で分譲住宅建設に伴う発掘調査が行われました。池ノ上遺跡では、これまで本格的調査が行われておらず、今回の調査により初めて古代（飛鳥～平安時代）の人々の暮らしについて考える手がかりを得ることができました。

調査では、7世紀末から9世紀後半までの竪穴建物跡による集落跡が発見されましたが、特に7世紀末から8世紀前半までの竪穴建物跡が多く確認されました。

このたびは、その最新の発掘調査により発見された集落跡の、主に竪穴建物跡から出土した遺物を展示します。この展示を通して、今から約1,300～1,100年前の妻沼地域ではどのような暮らしがあったかなどに思いを馳せ、古代の集落について理解を深めていただければ幸いです。

2 池ノ上遺跡と今回の発掘調査成果について

池ノ上遺跡は、市北部の利根川右岸近く、芝川の右岸にある自然堤防上に立地する飛鳥時代～鎌倉時代（今から約1,300～800年前）の集落遺跡です。

調査は、遺跡範囲の西端部において行われました。検出された遺構は、飛鳥～平安時代の竪穴建物跡18棟のほか、鎌倉時代の多数の溝跡、時期の詳細が不明な沼地状の地形などです。

竪穴建物跡は、7世紀末～8世紀初頭に属するものが5棟、8世紀前半に属するものが6棟と、検出された18棟の約6割を占め、8世紀後半～9世紀後半に属するものは、3棟と少ない状況です。また、カマドが設置されたか所を見ると、時期で共通した傾向が見られ、7世紀末～8世紀初頭のは北西の向きに、8世紀前半のものは北東の向きに設置されています。なお、8世紀以降は、棟数が少なく、詳細な傾向は不明ですが、9世紀中頃～後半のものは北向きに、9世紀後半のものは北西でもやや北向きに設置されている傾向が見られます。また、竪穴建物跡の分布状況ですが、調査が分譲



調査地点及び周辺遺跡分布図

住宅建設予定地12棟(A～L区)及び取り付け道路か所(R1～R3区)という限定されたものでしたが、おおむね古い時期の7世紀末～8世紀前半のものは北半に分布し、8世紀後半以降のものは南端の一部に局所的に分布していました。

出土遺物は、7世紀末から8世紀前半に所属する竪穴建物跡では、土師器^{はじし}坏・甕^{かめ}・台付甕^{だいつきかめ}、須恵器^{すゑ}坏・蓋^{ふた}・甕^{かめ}・壺^{つぼ}、土錘^{どすい}、砥石^{とishi}などが見られ、特殊なところでは、第2・14号竪穴建物跡から鉄鏝^{てつせき}が出土しています。また、9世紀(9世紀後半)になると、須恵器^{すゑ}椀^{わん}が見られるようになります。

7世紀末～8世紀初頭の竪穴建物跡からは、特徴的に、内面に放射状の暗文^{あんもん}を施文した土師器坏が見られるほか、同時期に属すると考えられる第7号竪穴建物跡からは、油煙が多量に付着する土師器坏が多く出土し、燈明^{とうめい}を灯すために使われたと考えられます。

なお、特殊な出土遺物として、第1号水田跡と呼称した遺構から、内面の底部に朱が付着した土師器^{はじし}小型鉢^{はち}が出土しています。

この度は、多数出土した遺物のうち、第1・7・8・9・14・18号竪穴建物跡、第2号焼成遺構、第1号水田跡の出土遺物を展示しました。

3 展示資料を出土した遺構について

(1) 第1号竪穴建物跡

B区の北半において、建物のほぼ全体が検出されました。カマドは、北西に向いた長辺壁の北寄りに設置されていました。

遺物は、主にカマド内及び貯蔵穴から出土し、土師器坏(暗文坏含む)・甕、須恵器坏・蓋・甕のほか、土錘、砥石などが出土しました。

時期は、7世紀末～8世紀初頭と考えられます。

(2) 第7号竪穴建物跡

東西に長いR1区のほぼ中央部において、建物のほぼ半分が検出されました。カマドは北西にむいた長辺壁のやや南寄りに設置されており、^{なきぐち}焚口において土製支脚が検出されました。また、検出された柱穴と考えられるピットは、建替えが示唆される状況で確認されました。

遺物は、主にカマド内及びカマド前において集中して出土し、調査された18棟の竪穴建物跡の中で一番の出土量がありました。その内容は、土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・甕・短頸壺^{たんけい}などで、土師器坏には、燈明皿として使われたものが多く含まれていました。

時期は、7世紀末～8世紀初頭と考えられます。

(3) 第8号竪穴建物跡

R-1区の東端部において、カマド及びその周辺部のみが検出されました。カマドは北西向きの壁に設置^{そて}されていました。

遺物は、土師器甕がカマドの両袖^{そで}の補強材^{ほきょうざい}として、倒立した状況で出

土しました。

時期は、7世紀末と考えられますが、他の同時期の竪穴建物跡から推測すると、8世紀初頭までの時期と考えられます。

(4) 第9号竪穴建物跡

D区の北半東寄り及びE区北西隅において、全体のおよそ3/5が検出されました。カマドはE区内に検出された第11号竪穴建物跡との重複が推定されますが、詳細は不明です。

遺物は、建物内に点在して出土し、土師器坏（暗文坏含む）・甕、須恵器坏・蓋・甕・長頸壺^{ちようけいかに}のほか、土錘、鉄釘、砥石などが出土しました。

時期は、8世紀前半と考えられます。

(5) 第14号竪穴建物跡

E区の南西部において検出されました。カマドは北西向きの壁の北寄り、建物の隅近くに設置されていました。

遺物は、カマド内及びカマド周辺を中心に出土し、土師器坏（暗文坏含む）・甕、須恵器坏・蓋・甕のほか、鉄鏃^{てつそく}や刀子などが出土しました。

時期は、7世紀末～8世紀初頭が主体で、8世紀前半までと考えられます。

(6) 第18号竪穴建物跡

東西に長いR-3区のほぼ中央部において、8世紀後半～9世紀初頭と考えられる第17号竪穴建物跡と重複して検出され、第18号竪穴建物跡が第17号竪穴建物跡を壊していました。カマドは北西向きの長辺壁の北隅近くに設置されていました。

遺物は、カマド内及びカマド前に集中して出土し、土師器坏・甕・台付甕、須恵器坏・椀^{わん}、内黒土器椀などが出土しました。

時期は、9世紀後半と考えられます。

(7) 第2号焼成遺構

R-3区の西部において検出され、平面形は、楕円形です。遺構^{いこう}を覆っていた土層には、焼土や炭化材が多く含まれていたことから、焼成遺構としましたが、詳細な性格は不明です。

遺物はわずかで、土師器坏などが出土し、灯明皿と考えられるものがありました。時期は、7世紀末～8世紀初頭と考えられます。

(8) 第1号水田跡

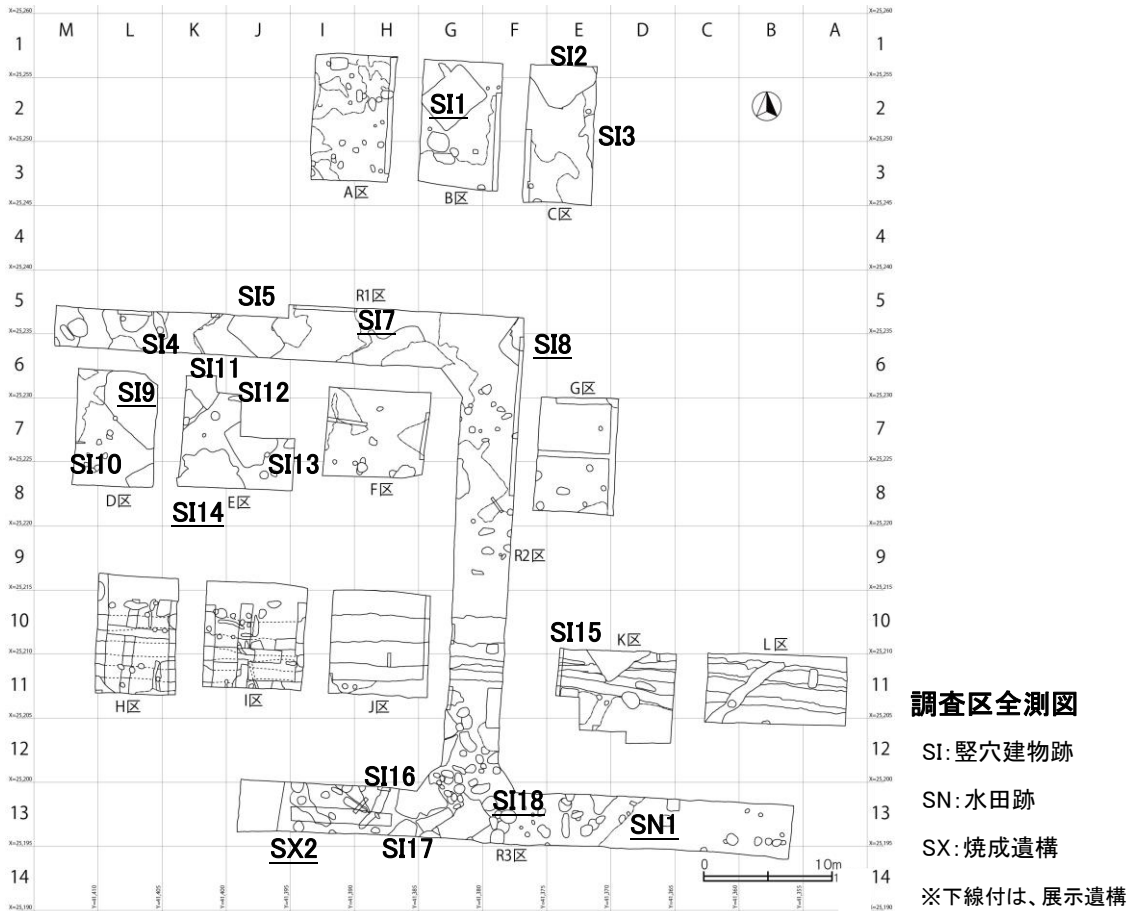
R-3区の東部において検出され、畦畔^{はいばた}（あぜ）と推定される遺構が検出されました。

遺物はわずかで、土師器坏・小型鉢（内面に朱の痕跡）・甕、須恵器坏などが出土し、出土遺物から考えられる時期は、7世紀後半～8世紀前半です。

4 おわりに

池ノ上遺跡及び周辺遺跡は、調査例が極めて少ない状況で、今回の池ノ上遺跡における調査成果は、貴重な情報を提供することとなりました。

調査により、この地域の飛鳥時代～平安時代の人々の暮らしの一端を垣間見ることができ、利根川に流れる支流である芝川沿いの自然堤防という当時から高い地形で、住みやすい場所を選んで、集落を形成していたことが分かりました。その集落の様子は、国家的な施策である大宝律令が制定され、奈良に都が造営された頃には多くの人々が暮らしていましたが、その後の平安時代になると、何らかの理由によりその拠点を他に移し、ここでの集落は衰退し、極小規模なものになったことが推定されるものでした。



第1号竪穴建物跡



第7号竪穴建物跡カマド



第18号竪穴建物跡遺物出土状況

平成28年5月31日発行

編集・発行：熊谷市立江南文化財センター（熊谷市教育委員会 社会教育課 文化財保護係）